

マスターズを彩るレジェンドたち(27)

暦の上では4月。卯月といえば風光る季節だ。桜の開花は？ 満開、それともまだ三分、いや五分咲きだろうか。地域によって、さまざまだろうが、春は楽しい。マスターズ陸上の活動も幕を開けたばかり。好記録の“たより”が届くのはこれからだ。今月紹介するのは競歩の浅野輝彦さん(神奈川)と、女子高齢スプリンターの川本静子さん(広島)。お二人とも味わい深いマスターズ人生を送っている。

浅野輝彦さん(82歳・神奈川) かつての競歩の名手は今なお健在

神奈川県海老名市に住む82歳の浅野輝彦さんは以前、日本競歩界で鳴らしたウォーカーだ。49歳でマスターズへ入会後も勝敗にこだわらず各大会に参加している。

全日本マスターズ大会へは1990年の第11回山梨大会に48歳で、M45・3000mWに出て、15分14秒9の日本新、大会新でトップに。以後、30年連続出場でマスターズ連合から表彰

を受けた。ちなみに次の第12回大会は宮崎市で国際大会を兼ねて行われ、M45・3000mWに出場、14分00秒74で優勝した。

M45クラスには不利な49歳でのことだ。ところが2019年の第40回記念国際・全日本マスターズ大会では、M75・3000mWで21分46秒83の3位と首位を明け渡している。コロナ禍で3年間中止の後、23年の第44回山口大会ではM80・3000mWに24分29秒41で1位になっているが――。

この年で81歳となっていた浅野さんは「80歳を越えると腰や脚が痛くなったりで」と笑いながら話す。その後「現在82歳ですが、まだまだ現役ですよ」。浅野さんが競歩の道へ踏み込んだのは19歳のときだ。川崎市の東芝堀川に勤めながら、当初は駅伝などに起用されていた。

そのうち東京で特殊種目競技会が行われることを知り「面白そうだ」と競歩に出てみた。距離は分からなかったが、これが競歩へ踏み切るきっかけとなった。そのうち1964年の東京五輪で競歩担当の指導者の目に留まり、競歩の基礎から指導してもらった。

2年後の日本選手権に出てみたら9位だった。さらに精進を重ねて、68年に岐阜で行われた第52回日本選手権の20kmWでは、先行振り切りのパターンで日本一のタイトルを手中にしたのだ。タイムは1時間41分05秒だった。この年、27歳。

68年といえばメキシコ五輪の年だ。日本選手権で優勝した浅野さんも五輪代表へ？ と思われたが「キャリア不

足」で代表に選ばれなかった。五輪強化選手になっていたのに。

この前後が浅野さんの全盛時代で、東日本実業団対抗では67年から13連勝したこともある。実業団対抗といえば、全日本実業団での5000mWで68年の第16回大会の23分30秒0から、73年の第21回大会まで6年間負けなしを誇った。

先の日本選手権の20kmWで1位になった後、2、3位と上位の成績を残している。日本記録ではトラックの5000mで69年に21分32秒4、10kmWは76年に44分16秒2を樹立した。若い年代での体格は164cm、55kg前後だった。

また、国体においては67年の埼玉・上尾での第22回大会の教員・青年5000mWに23分01秒4で優勝。第27回鹿児島大会の共通20000mWでは1時間41分02秒4で優勝した。浅野さんは「鹿児島の鴨池競技場では1周400mのトラックを50周しました。道路と違い風景は変わらず大変なレースでした」と振り返る。

これほど活躍した選手なのに、メキシコ五輪の代表を逃したのははじめ、海外でのレースには恵まれなかった。唯一、海外のレースに出たのは50歳代の前だったか、マレーシアであった競歩の大会だった。「あれは5月半ばごろだったか、とにかく暑くて暑くて」と、距離もはっきりしないが、9位でゴールしたことが記憶に残っている。

競歩一筋の人生だが、65歳で前立腺がん、70歳で心臓の病でカテーテル治療を余儀なくされたこともある。



19歳で競歩に出会ってから、各年代で結果を出し続けている浅野さん。写真提供/浅野輝彦さん

が、11月で83歳を迎える今も「ドクターからは無理は禁物といわれていますが」と言いながら、競歩の練習に余念がない。

夜は早いうちに寝て、起床は5時。食事の後、午前8時には天候に関係なく練習に出て、ゆっくりだが6kmほどは歩く。その後はジムへ行ってストレッチなどで体をほぐす。「これからも3000mを25分台維持で頑張りますよ。90歳までが目標です」と歯切れがいい。

川本 静子さん(96歳・広島) W95・短距離3種目で快記録樹立

とんでもないウーマン・シルバーのスプリンターが現れたものだ。見ている者すべてが「すごい！」と感嘆の声をあげた。

何がすごかったのか。それは96歳という年齢を感じさせない脚力だ。それを証明したのが2023年6月11日に広島のびんご運動公園競技場で行われた第41回広島県マスターズ陸上選手権でのこと。

トラックに立ったのはW95クラスの川本静子さんだ。60mから100m、そして200mと3種目をこなした。家族も応援に駆けつけた。長男の英雄さん(75歳)の話では「この日は好天で風もなく、走るにはもってこいの天候だった」そうだ。まずは60m。スパイクではなく、陸上用のアップシューズを履いた川本さんが走り出した。

アッという間に終わって、結果の発表。まず、みんなが驚いたのは川本さんのタイムだ。17秒33。従来の同クラスの日本記録は、間違いなければ19秒35。60mの距離で旧記録を2秒02も縮めた。

驚く第二声は次の100m。疲れを見せずに元気に走った川本さん。息を弾ませるわけでもなく、タイムを聞こうとする川本さんだが、耳が不自由なのだ。当の川本さんをよそに会場のみなさんは、タイム発表に驚きの声と拍手、また拍手。

そのタイムは28秒85だ。えっ？



すい星のごとく現れ、各種目で日本新を記録した川本さん。写真提供/広島マスターズ陸上競技連盟

30秒の壁を破ったの！ そう。世界記録は30秒16なのだ。ちなみに日本記録は35秒48。川本さんの脚の速さは尋常ではない。世界記録は2021年にルーマニアの選手が出し、日本記録は実に23年ぶりに破るものだった。

もう1レース。最後の200mは順調に走っていたものの「ゴール前10mほどでバツリと倒れてしまった」と英雄さん。にもかかわらず1分18秒8と、日本記録の1分19秒96を上回った。もし、ラストまで全力で走っていたら、と惜しまれた。

レース後の表彰があっても川本さんは耳が不自由なため、大喜びするようなしぐさは見られなかった。代わって喜んだのは家族のみなさん。

川本さんは広島県豊田郡大崎上島町の出身。地図を見てもらうと分かるが、瀬戸内海は芸予諸島の一つ。周囲が海の島だ。ざっと150cm、40kg足らずの川本さんだが、若い頃は船乗りといっても漁業ではなく、100トン級の運搬船の船長だったそうだ(英雄さんの話)。戦後、石炭が日本の主な産業だった時代に、石炭を積んで大阪や九州方面に運搬したという。

子どもさん3人の川本さんは陸上の経験はないが、幼い頃から脚は速く、

学校の運動会ではいつも1位だったそう。幼少時の脚を生かして、90代半ばで快記録をつくったのだろうか。

同県のマスターズ陸上で好記録をマークしたのは？ まずマスターズへ入会したのが同陸上選手権の前。「年齢別の大会があるので、(脚が速い)ということなので出てみたら」と伝え聞いたのが出場のかきかけ。

それまで練習など一度もしたことがなかったが「出る以上は」で、大会数日前に「4～5日、道路で走る練習をした」(英雄さん)。1回は「100mのタイムを計てみよう」と、道路できっちり100mを計て走ってみた。そのとき、びっくりしたのが家族の人たち。32秒だったのだ。

「えっ？ 32秒。W95クラスの日本記録は35秒台とか。それより上とは」と顔を見合わせた。こうした経緯あって出場に踏み切った結果が、日本新の連続につながったのだ。

川本さんの今後は――。英雄さんの話では「これからも大会に出て、いまいちいい記録を出そう、とかの気持ちは持ち合わせていないようです」と。現在は「記録をつくった」という意識はなく、周辺の畑で野菜づくりを楽しむ日々だという。